

Propertius, 2.25.1 における unica について

平野智晴

Vnica nata meo pulcherrima cura dolori,
excludit quoniam sors mea saepe 'ueni,'
ista meis fiet notissima forma libellis,
Calue, tua uenia, pace, Catulle, tua. (Prop. 2.25.1-4)*1

1 unica] Cynthia *Phillimore* 2 excludit] excludi *Scaliger* ueni *N p.c.*,
ITT, S p.c., *GYC*: uenit *N primo*, *S primo*: uehit *Lachmann*: fuit *Watt 1992*

本論は、Propertius, 2.25.1 における unica について、テキストの読みを維持しつつ新たな句読法を提案し、それらを踏まえて、本詩全体の解釈を再考するものである。

伝承されてきた unica に対して、Cynthia という読みを最初に提案したのは、Phillimore であった。彼は、Cynthia の冒頭の綴り 'C' が、強調のために赤文字 rubricator で書かれており、これが消失したことで、唐突な印象を与える unica へと壊れた、と推測するのである*2。この読みは Goold*3、Heyworth*4 によって支持されているが、とりわけ後者は、その註釈において、cura が必要としているのは第二の形容詞ではなく名詞であり、さらに望ましいのは cura が同格として機能し得る名前である、と論じ、そのように同格になる cura 例を複数挙げている*5。

しかし、この Cynthia という読みには、以下に示す二つの困難が存在する。

第一は、Cynthia から unica に壊れた経緯の説明がやはり充分とはいえない、ということである。この想定された過程自体 unica に壊れたという結果を前提として導き出されたものという印象が拭えないし、プロペルティウスの作品のなかで最も壊れにくい固有名詞であるはずの Cynthia が、たとえ万が一にも冒頭の赤文字 'C' が落ちたとして、それだけで全く修復不能の状態に陥ったとも考え難い。

第二は、Fedeli が論ずるように、そもそもプロペルティウスの作品において、詩の始まりに Cynthia が呼格として現れる例はひとつもない、ということである。むしろ、Cynthia

*1 テキストは大多数の写本の採用するところに準拠し、apparatus criticus は Heyworth^b の情報をもとに筆者がまとめた。以下、テキストはこの方針に従って引用する。

*2 Phillimore 9.

*3 Goold 174.

*4 Heyworth^b 76.

*5 Heyworth^a 217-218.

が呼格として一行目のヘクサメトロスに現れる時、その位置は、必ず末尾から二語目である*6。ただ一例、詩の始まりに主格として現れるのが I.I.I Cynthia prima ... であるが、これには、愛する女の名を明らかにし詩集の表題を提示する、という詩人の意図がある*7。

ゆえに、プロペルティウスの叙述の傾向を踏まえたとき、本詩においても、このような特異的な位置に、固有名詞呼格としての Cynthia を、わざわざ伝承の unica を修正してまで、採用すべきではないように思われる。

むしろ、問題は、unica ... pulcherrima ... cura という、二重の形容詞が名詞にかかる、一見したところの不自然さをどう解決するか、ということであろう。この点について、以下に示す二つの考え方が提案されている。

第一は、unica は pulcherrima を強調している、と考えることである*8。このとき、unica が pulcherrima cura に従属することで、第一義的に有する「唯一の」という意味が事実上失われることになる。

第二は、unica を femina に類する語を補って、pulcherrima cura が同格として機能している、と考えることである*9。このとき、unica (sc. femina) が pulcherrima cura によって言い換えられることで、この「唯一の」という意味は維持されることになる。

前者については、プロペルティウスの作品から他に類例が挙げられない*10、という点が問題である。また、先に示したように、pulcherrima と共に用いられこれを強調することで、unica から「唯一の」という意味が事実上失われてしまうことも、本詩全体の理解によっては問題になるであろう（これについては、cf. n. 16）。

後者については、Fedeli が論ずるように、unica nata を、挿入句 pulcherrima cura を介して、meo dolori が (pulcherrima cura と間接的に関わりながら) 修飾しているとし、句読法を unica nata meo, ..., dolori とすることが考えられる*11。しかし、語順の点から見ても、

*6 e.g. I.I.I.I Ecquid te mediis cessantem, Cynthia, Bais; I.19.I Non ego nunc tristis ueeor, mea Cynthia, Manis; 2.5.I Hoc uerum est tota te ferri, Cynthia, Roma; 2.7.I Gausia es certe sublatam, Cynthia, legem; 2.16.I Praetor ab Illyricis uenit modo, Cynthia, terris.

*7 以上、n. 6 における類例の列挙も含めて、Fedeli^b 707 に拠った。

*8 Rothstein 368 ad I.

*9 Richardson 284 ad I, Fedeli^b 707.

*10 今回筆者が行った調査の限りでは、プロペルティウスの作品において、unus ないし unicus が最上級と並立(し、前者が後者を強調)する類例を他に見出すことができなかった。solus と最上級の並立については、唯一の例として I.I6.35 が見出されたが、これも、後述するように、前者が後者を強調する類例とはいえない (vid. n. 13)。

*11 以上の議論は Fedeli^b 707 に拠った。後述するように、Richardson 284 ad I も同様の句読法を採用する (vid. p. 71)。

Fedeli 自身が挙げる類例から見ても*12、*nata meo ... dolori* は直接 *pulcherrima cura* に伴われるべきではないだろうか。

そこで、私は、後者の立場から、*unica* を独立させ直後にコンマを打つ、という新たな句読法を提案したい。すなわち：

Vnica, nata meo pulcherrima cura dolori,

...

ista meis fiet notissima forma libellis,

ただ一人の女よ、私の心を苦しめるために生まれた、最も美しい悩みの種よ、
(.....)

その美しさが、私の詩集によって、最も知られたものとなるだろう、

このような表現には、以下に示すような、かなり近似した類例がある：

fortunata, meo si qua est celebrata libello!

carmina erunt formae tot monumenta tuae. (Prop. 3.2.17-18)

幸運な女である、私の詩集によって、誰か讃えられたならば！

詩は、お前の美しさの、これほどまでの記念碑となるだろう。

すなわち、3.2.17-18 と 2.25.1, 3 を比較したとき、まず、*fortunata* と *unica* という形容詞が冒頭に現れ、それらに *si qua est celebrata* と *nata ... pulcherrima cura* という条件前文と修飾された名詞が、それぞれ *meo ... libello* と *meo ... dolori* という手段の奪格と目的の与格を伴って続いており、その後も、*meo ... libello* は *meis ... libellis* と、*erunt* は *fiet* と、*formae ... tuae* は *ista ... forma* と、*tot monumenta* は *notissima* とが、ほぼ正確に対応しているのである。

無論、3.2.17 *fortunata* が *femina* に類する語を補って独立させられ直後にコンマが打たれているのは、これが条件節前文 *si qua est ...* の後文と見なされているからである。しかし、私は、この、詩行の冒頭において形容詞が *femina* に類する語を補って独立させられ、「幸運な女」と読むことが可能とされている、という事実を重視したい。すなわち、2.25.1 *unica* もまた、*femina* に類する語を補って独立させられ、これによって漠然と「女」という対象を示唆し、続いて目的の与格を伴った *pulcherrima cura* が換喩的に言い換えている、と考えるのである。*cura* も詰まるところ「女」を意味するのであるから、「(ただ一人の)

*12 cf. *cura* が *dolor* を伴う例として、Catul. 65.1 *Etsi me assiduo confectum cura dolore*; Lucr. 4.1067 *et servare sibi curam certumque dolorem*. *nata* が同格による言い換えや目的を表す不定詞を伴う例として、Ov. *Am.* 2.5.4 *o mihi perpetuum nata puella malum!*; 2.17.12 *o facies oculos nata tenere meos!*

女」から「(最も美しい) 悩みの種」への移行は、自然といえるであろう*13。

さらに、unica (sc. femina) と読むことには、本詩の末尾 48 una sat est ... femina との対応がより明確になる、という利点がある*14。Richardson もまた本詩行を Unica nata meo (pulcherrima cura) dolori と見なし、“The one woman born to make me suffer in love, loveliest of troubles” と、unica を femina で補い cura と同格のものとして解釈し、48 una ... femina との対応にも言及している*15 が、本論における句読法の提案によって、このように挿入句を想定するいささか無理のある解釈に拠ることなく、しかしさらに容易に彼の主張する対応を論ずることが可能になるのである*16。

このことを踏まえて、本詩全体の主旨を考えるならば、次のようになるであろう、すなわち：

- 1-20：誰であれ一人の女に忠誠を誓い続けることの極度の困難を、求愛詩を書くことで女を讃え続ける詩人のペルソーナ自らを例とすることによって示している。
- 21-38：始まりは順風満帆の恋でもいずれ女の不義に苦しめられることになる、という世の習いを、女を知ったばかりの男に呼びかけることによって示している。
- 39-48：色々な女に手を出したところで手を出した分だけ厄災を大きくするだけである、という事実を、伊達男に呼びかけることによって示している。女は一人で充分。

詩人のペルソーナは、誰であれ女に手を出せばいずれ必ず苦しむことになり、一人に尽くし続けるのはもちろんのこと、複数に手を出してもその人数分だけ苦しむことになる、ということ、語りかける対象を変えながら主張しているのである*17。

もともと、詩人のペルソーナが「ただ一人の女」と言っても、これはキュンティアのこ

*13 このような類例として、I.16.35-36 sed tu sola, mei tu maxima causa doloris, / uicta meis numquam ianua muneribus, ... これは、unus や unicus に類する solus が最上級と並立する類例でもある。本詩行もまた、二つの tu が差し挟まれる位置から考えて、「(……) 唯一の君よ、私を苦しめる最大の原因である君よ、(……)」と解釈すべきであろう。すなわち、「唯一の君」から「最大の原因」さらに「扉」という形で、最初に漠然と相手呼びかけてから、言い換えを繰り返すことによって、それが何であるかを明確にしているのである。

*14 Richardson 286 ad 48. これに対して Heyworth^a 217.

*15 Richardson 284 ad 1. ただし、引用英文における下線は筆者による。

*16 ゆえに、私は、Rothstein らの、unica が pulcherrima cura を強調しているという解釈には、本詩全体の解釈から問題がある、と考える。

*17 呼びかける相手を次々に変えていく、というプロペルティウスの表現の独自性については、cf. Benediktson 34-36.

とを指しているのではないか、あるいは、そう言うことで読者にキュンティアのことだと理解させようとしているのではないか、という疑問は残るであろう。unica から Cynthia への修正が提案されていること自体、背景にそうした問題意識があつてのことだからだ。

無論、unica と記された女は、突き詰めれば、キュンティアと特定されることになるであろう。しかし、詩人のペルソーナは、ここでは、敢えて一人の女に尽くす一例として提示しようとしているように思われる。

第 I 巻第 I 歌において、キュンティアへの恋に苦しむ詩人のペルソーナは、遅まきながらやって来たアモルは自分に何ら策も道も教えてくれない、と嘆き*18、相思相愛で満ち足りている者たちに対して、自分たちの関係のなかに止まるよう忠告した*19。これは自分にとっての「特別な恋」なのであり、他の者であれば避けることができる、と考えたからであつた*20。しかし、いまや、詩人のペルソーナは、このような苦しみに満ちた「特別な恋」は誰にでもやって来るものである、と断言し、各人が各人の道を手探りで歩まなくてはならない、と主張する。かつて自分にとって余所事のように思われていた各人と各人の「cura 悩みの種＝想い人」との関係は、実のところ、他の者の関与や追従を許さないはずの自分と自分の「cura 悩みの種＝想い人」との関係と、反復・互換が可能なものである、というのである。

自らの恋の特権性を放棄することで、詩人の立場は、一見、後退したかのようにも思われる。しかし、これまで手を替え品を替え語ってきた自らの苦しみが他の者の恋にも起こり得る、と言うことは、むしろ、自分を苦しめている「恋の力」がかつて考えていたよりも遙かに強大で普遍のものであつた、と認めていることと同じではないだろうか。

プロペルティウスは、Cynthia ではなく unica と記すことで、突き詰めればキュンティアと特定される自身の女との恋を、一人の女に尽くす一例として提示しようとした。自らの「特別な恋」が各自の「一般の恋」のひとつとして「教え得る」という「矛盾」、そこにこそ「恋の力」の本当の強大さ・普遍さがあるのであり、unica という語は、そのような「力」の在り方を端的に表しているように思われる*21。 (東京大学)

*18 I.1.17-18 in me tardus Amor non ullas cogitat artis, / nec meminit notas, ut prius, ire uias. cf. 2.25.38 unus quisque sua nouerit ire uia.

*19 I.1.31-32 uos remanete, quibus facili deus annuit aure, / sitis et in tuto semper amore pares. cf. 2.25.21-22 tu quoque, qui pleno fastus assumis amore, / credule, nulla diu femina pondus habet.

*20 I.1.35-36 hoc, moneo, uitate malum: sua quemque moretur / cura, neque assueto mutet amore locum. cf. 2.25.1.

*21 本論は、東京大学西洋古典学研究室で2014年度に開講された、「ラテン語韻文講読」(大芝芳弘教授担当)における議論から着想を得ている。とりわけ、本詩の訳読を担当された博士課程の中川未来さんからは、関連文献についてもご紹介頂いた。また、実際に本稿を作成・推敲するにあたっては、二名の匿名査読委

参考文献

- Baehrens, E. ed., *Sex. Propertii Elegiarum Libri IV* (Teubner; Lipsiae 1880).
 Benediktson, D. T., *Propertius: Modernist Poet of Antiquity* (Carbondale and Edwardsville 1989).
 [Benediktson]
 Butler, H. E. and Barber, E. A. ed., *The Elegies of Propertius* (Oxford 1933).
 Camps, W. A. ed., *Propertius, Elegies Book I* (Cambridge 1961).
 Camps, W. A. ed., *Propertius, Elegies Book II* (Cambridge 1967).
 Camps, W. A. ed., *Propertius, Elegies Book III* (Cambridge 1966).
 Enk, P. J. ed., *Sex. Propertii Elegiarum Liber Secundus*, 2 vols. (Leiden 1962).
 Fedeli, P. ed., *Sextus Propertius, Elegiarum Libri IV* (Teubner; Stuttgart 1984). [Fedeli^a]
 Fedeli, P. ed., *Properzio, Elegie Libro II* (Cambridge 2005). [Fedeli^b]
 Goold, G. P. ed., *Propertius, Elegies* (Loeb CL; Cambridge, Massachusetts and London 1990).
 [Goold]
 Heyworth, S. J., *Cynthia* (Oxford 2007). [Heyworth^a]
 Heyworth, S. J. ed., *Sexti Properti Elegos* (OCT; Oxford 2007). [Heyworth^b]
 Hosius, C. ed., *Sex. Propertii Elegiarum Libri IV* (Teubner; Lipsiae 1922).
 Hubbard, M., *Propertius* (New York 1975).
 Kuinoel, C. T. ed., *Sexti Aurelii Propertii Opera Omnia* (London 1822).
 Paley, F. A. ed., *Sex. Aurelii Propertii Carmina* (London 1872).
 Phillimore, J. S., 'In Propertium Retractationes Selectae' *CR* 28 (1914) 7–12. [Phillimore]
 Richardson, L. ed., *Propertius, Elegies I–IV* (Norman and Oklahoma 1976). [Richardson]
 Rothstein, M., ed., *Propertius Sextus, Elegien* (Dublin / Zürich 1966). [Rothstein]
 Shackleton Bailey, D. R., *Propertiana* (Cambridge 1956).

員から数々の貴重なご助言を頂いた。着想から推敲まで関わって下さった全ての方々、この場を借りて感謝の意を表したい。無論、本稿に残る不備は、筆者の責任に帰するものである。